

偉大な芸術は、偉大であればあるほど時代を越えようとしているから、同時代では理解されないことがしばしばある。時代に先駆ける天才的芸術家と、その時代の間には、修復したい対立がある。例えば、ゴッホやセザンヌは時代に先駆けた天才であったが、それゆえにこそ、その時代には評価されなかった。ゴッホは、生前にはまったく無視されていたし、セザンヌに対する評価もあまりにも遅すぎた。ゴッホやセザンヌは、絵画において、ほとんど信仰にも近い形で徹底的に〈生命〉や〈形〉を追究していったが、しかし、それは少しも時代と調和しなかった。芸術作品とその時代との食い違いは、この天才たちにおいては凄まじいものがあった。

ところが、彼らの作品は、時代が変わることによって急に評価されるようになる。時代の体験がようやく彼らについてきたとも言える。あるいは、時代の体験が、失ったものによりやぐ気づいたのだとも言える。そして、その失ったものを、その時代よりも以前に表現していた天才がいたことを、時代はようやく理解するようになる。かくて、同時代には評価されなかった作品が、独創的なものとして蘇る。

まったく見向きもされなかった作品が、時代が変わることによって評価され、作品が再生してくる。縄文時代には単なる生活の道具や祭器であった土器が、現代になって急に素晴らしい芸術として評価されるようになる。縄文時代の呪術的世界とそれを失った現代の文脈とは違うのだが、違うからこそ、逆に芸術として評価されるのである。場が変化するからである。とすれば、芸術作品は評価によって誕生するとも言える。批評家や鑑賞者が評価して、はじめて、一つの芸術作品は確立する。作品を解釈し評価しながらこれを形成する力として、批評家や鑑賞者を位置づけねばならない。時代時代に応じて評価変えされていくことによって、作品は継続した価値と意味をもつのである。

作品そのものは、それだけで意味をもつのではなく、それが置かれる文脈によって理解される。文脈が変わると、作品の見え方は変わり、意味も評価も違って現れてくる。わが国の江戸時代では単なる世俗的・商業的ポップアートにすぎなかった浮世絵が、その後、アメリカやヨーロッパで高度な芸術として評価されたように、同じ一つの作品も、別の文脈に置かれると意味が変わる。作品は、それぞれの文脈から物語られるのである。芸術作品が、それが成立した文脈を越えて長く生き長らえるのは、後の時代に常に評価変えされていくからである。

作品の意味や価値はそれ自身によって決まるのではなく、それが置かれる諸関係、時や所、機会や鑑賞者によって規定される。作品の意味や価値は、場の変化とともに変化するから、一義的には決まらない。作品がどのように評価されるかは出会いにより、偶然性を免れない。一つの芸術作品が成功するかどうか、制作者の主観的な意図や信念では決まらない。作品の置かれる場や連関、文脈や時代が、むしろ意味や価値の源泉なのである。

旧石器時代の洞窟壁画にすでに現れているように、芸術作品は体験の表現であり、表現は生命の根源的な働きである。しかし、表現を理解するには、われわれの側の体験がなければならぬ。われわれは、体験することによって理解する。深い体験をもった者は、作品の深い意味を理解する。カントが『判断力批判』の中で強調していたコウ想力の源泉にも、体験がなければならぬ。しかも、一つの作品が理解されるには、共通体験がなければならぬであろう。例えば、わが国の水墨画にしても、俳句にしても、それは一つの象徴であり、その象徴が理解されるには、その背景にわが国の気候風土に根差した共通体験がなければならぬ。

しかし、それだけでも、理解は不十分である。特に、過去の作品と現在とでは時代の隔たりがあり、理解はしばしば困難である。縄文土器の作者の当時の体験と現代人の体験は、その条件において大きな乖離がある。その乖離を埋め合わせるのは、それほど容易ではない。過去の体験と現在の体験、理解されるべき物と理解する者の間には、抜きがたい差異がある。過去の作者の体験をそのまま追体験することも不可能である。体験の普遍性もない。

だが、共通体験とか、追体験といっても、同じ体験である必要はない。むしろ、時代の隔たりがあり、体験間に断層があるからこそ、理解は必要なのである。理解するためには、ある程度距離がなければならぬとも言える。体験と体験が表現を通して共鳴することが理解ということであるが、作者の体験と鑑賞者の体験が同一であることはできない。体験と体験の間にはズレがあるのだが、それにもかかわらず、体験と体験が共鳴するところに解釈は生まれる。すぐれた芸術作品に出会ったとき、水を打ったように沈黙を強いられる時があるが、このとき、作者の体験と鑑賞者の体験は、違いながらも火花を散らしている。そこから体験の重ね合わせができ、作品の体験と自己の体験が共鳴するとき、作品の解釈が誕生する。解釈が成り立ったとき、体験それ自身より深い自覚がもたらされる。

鑑賞者が、その置かれて自己の体験から問いを立てる。その問いに対する答えが作品の中に表現されているとき、それを、鑑賞者は自己の体験から解釈する。そのとき、過去の作品は蘇り、過去と現在が結びつく。それは、現在から過去を照射することでもある。

作品は、過去の作者から現在の鑑賞者へと架けられた橋である。それが、相互理解のシンボルになるには、過去の作者と現在の鑑賞者との映し映されの関係がなければならない。こうして、過去の作者と現在の鑑賞者の出会いから、作品は絶えず新たに理解され、解釈の歴史が生ま出される。その解釈は、時代の体験の変化とともに変化し、完結することはない。

理解とは出会いである。理解は鑑賞者と作者との出会いであり、それ自身出来事である。このとき、自己と他者の両方の理解が可能になる。私自身の体験から作品がよりよく理解でき、逆に、作品をよりよく理解できて、私自身がよく理解できる。私は、作品に出会うこと<sup>3</sup>によって自己に出会う。私は、作品を通して自己を再発見する。自己理解は他者理解であり、他者理解は自己理解である。芸術作品はそのためにある。

鑑賞者自身、歴史的・風土的に条件づけられているから、鑑賞者は、それを背景に作品を理解する。理解は、解釈者が立っている歴史的・風土的視野と、作品が背景にもつ歴史的・風土的視野が重なるところに成り立つ。しかも、解釈者の視野は多様だから、その重なりも多様である。

したがって、一つの作品は多くの視野から眺められ、そのパースペクティブの違いによって、様々な解釈が可能であり、統一的合意は成立しない。どんな作品も、限りなく多様な鑑賞が可能であり、唯一絶対の美は存在しない。理解とはある視野からの解釈であり、視野の変化にしたがって、作品の見え方も変わる。時代の移り変わりとともに視野も移動するから、その視野の違いに応じて作品解釈も変わる。時代の変化はパースペクティブの変化をもたらし、解釈の変化となる。

(小林道憲「芸術学事始め―宇宙を招くもの」による)

(注) カント——ドイツの哲学者。 乖離——離れていること。  
パースペクティブ——視点、視野。